



9 月 号

平成 29 年 9 月 25 日

桜花爛漫

郷土を舞台に 夢に向かい ともに歩む学校

心豊かで
たぐましい荘川っ子

- ・考える子
- ・思いやりのある子
- ・元気な子

信じ合い 輝く

校 長 水 口 悟

螿虫戸を坯す（すごもりのむし とをとざす 秋分・次候）

虫が隠れて戸をふさぐころ。土の中への巣ごもりの仕度をはじめます（新暦では、およそ九月二十八日～十月二日ごろ 日本の七十二候を楽しむより）

「泣けました。」という牧下保育園長さんの言葉。子どもたちの成長を幼い頃から一番長く見届けている方の言葉には重みがあります。子どもたちの集中力はすばらしかった。2学期が始まり、約10日で合同運動会を仕上げてしまいました。しかし、子どもたちへの指導の布石は、1学期から小中学校の先生方により着々と打たれていました。少人数であるがゆえに難しい団長の選出等々、9月9日に至るまでに数々の感動のドラマがありました。期待しているからこそその厳しい指導に、あるときは立ち尽くすこともありましたが、しっかりと自分を見つめ直し応えて見せてくれる子どもたちの成長ぶりは、見ていても心に迫るものがありました。「先生方、よくここまで伸ばしてみえる。」と、菱田（主幹教諭）先生が、子どもたちと先生の様子を幾度か話してくれました。赤団と白団のキレのある声と統一感ある動きは、日に日に逞しくなり、体育館から聞こえてくる声も大きく迫力あるものになっていきました。長期スパンの教育の過程で、一つ一つの壁を感動のドラマとともに乗り越えさせる先生方の熱い指導はやはり凄い。教育のプロです。小規模校のよさを生かし‘手厚く鍛える’という指導により、一人一人の個性が輝き出します。



<第10回 小中合同運動会記念写真>

プログラムN○13大縄跳び（小中全員）を思い出します。児童から生徒へ、生徒から児童へインタビューする姿は大変微笑ましく、それぞれのパフォーマンスも笑えました。それでも、勝負になれば赤団も白団も真剣・絶対負けるものかモードに切り替わり、一心に縄を跳び続けました。大縄を跳ぶリズムを作り出すために「ハイ！ハイ！」と声をかけ合う小学生の姿や、自ら大縄を跳び続けながら団員全員に声をかける中学生の姿は、とても頼もしかった。9年間という発達段階の異なる子どもたち全員の姿を一同に見られる、この合同運動会のすばらしさを改めて再認識しました。決勝審判の平田先生が渋い声で判定を伝えます。一瞬、静まり変えるグラウンド。「合計！608 VS 604で赤団の勝

ち！」晴哉さんのプレゼントポイントも加わり、「感動の種目」となりました。9年間という年齢差のある小中合同運動会の中で、「思いやりと憧れ」という学年の枠を超えた小中一貫教育こそが生み出す刺激が、見事に子どもたちを育てていると感じました。

84名の子どもたち全員と保護者・地域の方々が笑顔いっぱい映っている写真が大好きです。「信じ合い輝く 荘川町」映し出している象徴の一枚です。「私にできることがあれば何でもやるよ。」と言ってくくださった三島さん、本当にありがとうございました。最終種目「荘川町伝統のえっさえさ」後に、青空に向かってドローン撮影したみんなの笑顔は、第10回小中合同運動会記念の一枚になりました。